

『舞姫』問題演習 解答

【三一六ページ】

問「石炭をばはや積み果てつ」（１行）の「をば」と「つ」を文法的に説明せよ。

答を——格助詞。動作の対象を示す。
ば——係助詞。格助詞「を」につくときは「ば」と濁る。提示。
つ——完了の助動詞「つ」の終止形。

問「熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。」（１行）は豊太郎のどういう心情を表しているか。

答「いたづらなり」は「無益である」「役に立たない」という意で、ここにはあまりの明るさに耐えられない豊太郎の内面の暗さとしるめたさが表現されている。

問「五年前のことなりしが」（３行）と、この小説は過去を回想する形を取っているが、これはどういう意味を持っているか。

答もはやことは決定してしまい、そこに残されているのは重苦しい現実だけであるということを表している。もう過去へは引き返せない状態である。

問ドイツ渡航前の豊太郎と現在の豊太郎の違いを述べよ。

答ドイツ渡航前——エリートとしての明るい前途があり、旅の途中で見聞するものすべてに新鮮な感動を覚え、筆にまかせて稚拙な文を書くなどした。

現在の豊太郎——プリンディシイの港を出てからすでに二十日もたつのに、船室内に閉じこもったまま、日記も手につかない孤独と憂愁の中で苦悩を深めている。

問豊太郎が日記を書けない理由は何か。またそれは豊太郎をどのように悩ませてきたのか。

答豊太郎が日記を書けない理由は、「人知らぬ恨み」（三一七・１０）があるからである。

【三一七ページ】

傍問「別に故あり」（１行）とあるが、その「故」とは何か。

答これから語られる胸痛むドイツでの出来事。

問「げに」の品詞と意味を記せ。

答品詞Ⅱ副詞。意味Ⅱまったく。いかにも。古語では、まことに。なるほど。

問「げに東に帰る今の我は、西に航せし昔の我ならず」（２行）に用いられている修辞法を説明せよ。

答「東に帰る今の我」と「西に航せし昔の我」とが対句になっている。

【三一八ページ】

傍問「さ」（７行）は何をさすか。本文中から抜き出せ。

答「心地すがすがしくもなりなん」（６行）

問「さはあらじと思へど、……いで、その概略を文につづりてみん。」（７・９行）とあるが、ここで豊太郎は、詩にうたったり、歌に詠んだりしてもその恨みは消えまいと思いつつも筆をとる気になっている。これにはどういう理由が考えられるか。考えられる理由を箇条書きにせよ。

答○今宵は静かで周囲に人もおらず、また消灯の時間までは間があるから。

○豊太郎の船はセイゴンの港にいる。ここまで来ればもう日本は近い（当時はヨーロッパからの船旅は三か月近くかった）。そこで

帰国する前に自分の気持ちを整理しておきたいと思ったから。つまり、〈銷恨〉をなそうとしたから。

【三一九ページ】

問「五十を越えし母に別るるをもさまで悲しとは思はず」（２行）とあるが、その理由を説明せよ。

答自分が立身出世するのも、家を興すのもこのときであると気持ちが勇み立っており、同時にこれは母の希望でもあったから。

問ベルリンについた豊太郎が決意していたことは何か、その部分を本文中から抜き出して記せ。

答「たとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動かさじ」（三二〇・６）

問「我が目を射」（５行）、「我が心を迷は」（６行）した事物とは何か。

答「あだなる美観」（三二〇・６）のことで、具体的には「隊々の士女」（８行）以下「凱旋塔の神女の像」（三二〇・４）までに描かれている。

【三二〇ページ】

問「喜ばしきは、我がふるさにとて、独逸、仏蘭西の語を学びことなり。」（１０行）とあるが、『舞姫』の中で豊太郎のフランス語の語学力はどういう役割をしているか。

答豊太郎はフランス語の語学力があったため、天方伯に従って通訳としてロシアへ行き、そこで大いに活躍する。天方伯に語学力を認められた豊太郎は帰国を勧められる。つまりフランス語の語学力が豊太郎の帰国の運命を決定したと言える。

問豊太郎の自己認識はどう変化したか。ドイツへ留学し三年が経過する以前と以後に分けて答えよ。

答三年が経過する以前——豊太郎は幼少時から儒教精神に基づく教育を受け、「神童」と言われた。大学法学部入学後も首席を通し、十九歳という異例の弱年で学士の称を受けた。すぐに某省に出仕し、三年後には官費で洋行することとなった。ドイツ留学後も、ひたすら洋行の目的を達しようと同鑽につとめた。——立身出世の最短コースを行くエリート官僚であった。つまり、主体性も自己の行動理念もなく、単にレールの上に乗せられて、その上をひた走るのみの、受動的で機械的な人間であった。期待されたものに合わせて生きており、それに疑問を抱かなかった。

三年経過後——豊太郎は過去の自分の生き方に疑問を覚えるようになる。それは近代都市ベルリンの大学において自由な雰囲気身を置いたところから自覚されてきたものであった。豊太郎のそれまでの生き方には、自由な意志の選択による主体的な生き方がなかった。それに初めて気づいた豊太郎は、自己の生き方を模索するようになる。

【三二二ページ】

傍問「昨日までの我ならぬ我」（１５行）とは、どういうものか。

答期待されたものに合わせて生きてきた私。

問豊太郎の自我は覚醒したが、それは日本から遠く離れた異国ドイツにおいてであった。このことをふまえ、豊太郎の自我の目覚めがドイツで可能になった理由を説明せよ。

答日本の官僚機構と「家」の束縛から切り離されている状況のもとで、ドイツの大学での自由な雰囲気に触れたから。

【三二三ページ】

問ここにおいて官長と豊太郎の関係はどう変わったかを説明せよ。

答官長は豊太郎が「法の精神」（７行）を大切にし、自らの意見を

はばかりことなく言うのを憎むようになった。

問 豊太郎は他の留学生仲間から、どのような人物とされていたか、簡潔に答えよ。

答 頑固な禁欲主義者。

【三二四ページ】

問 「ああ、彼も一時」(14行)の「彼」とは何をさしているか。

答 有為の人物で、耐忍勉強力がある自分。

問 ここで豊太郎は自分の性格をどのようなものとして分析しているか、簡潔に答えよ。

答 性格の弱さゆえに受動的な生き方をしてきた人間。

傍問 「我が本性」(16行)とは、どういうものか。

答 涙を流さずにいられないような豊太郎の内面の弱さ。

【三二五ページ】

問 「かの人々」(3行)とは、誰のことか。

答 「伯林の留学生のうちにて、ある勢力ある一群れ」(三二三・13)のこと。ベルリンにいる日本人留学生の中の、ある勢力のある一団。

問 「これぞ余が兀罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽くすなかだちなりける。」(11行)とあるが、「無量の艱難」とは、いったい何のことなのか説明せよ。

答 狭く捉えれば、豊太郎の免官をさしている。またそれに母の死を加えることも可能である。また広く捉えれば、豊太郎がエリスと知り合ってから帰国するまでの事件すべてをさして「無量の艱難」ということもできる。その場合は「舞姫」を「貴種流離譚」(竹盛天雄氏)「冥界下降譚」(山口昌男氏)とも読むことになる。

問 「余が兀罪」(11行)は具体的にどの部分ををさしているか。本文中から抜き出せ。

答 「余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふこと」(三三一・3)

【三二六ページ】

問 豊太郎とエリスの最初の出会いの場所はどういうところか説明せよ。

答 クロステル巷の古寺の前で、豊太郎のそれまでの生活とは縁のない場所である。つまり、陋巷とも貧民街とも言うべきところである。

問 「声を吞みつつ」(8行)の意味を記せ。

答 声を出さないで。

問 「ここに立ちて泣くにや」(15行)のあとに省略されている語を補え。

答 あらむ

問 豊太郎はエリスにどういう気持ちで声をかけたのか。

答 エリスの清純な美貌に一目で魅せられ、声をしたので泣くその様子に憐憫の情を覚え声をかけた。

【三二七ページ】

傍問 「彼」(7行)とは誰か。

答 「シャウムベルヒ」(三二九・13)

問 ここでのエリスはどのような少女として造型されているか説明せよ。

答 動転しているエリスには、事情を知らない見ず知らずの豊太郎に、前後の脈絡もなく話を始めたりする幼さもあるが、それもまた可憐であり、また容貌の美麗さや清純さは、豊太郎の心を揺さぶるに十分であった。

【三二八ページ】

問 「エリスの余に会釈して入るを、彼は待ちかねしごとく、戸を激しくたたて切りつ。」(10行)とあるが、エリスの母はなぜこのようなねをしたのか説明せよ。

答 エリスがシャウムベルヒに貞操を売ることをなかなか納得しやうとせず、部屋をたび出してゆき、さらに見知らぬ東洋人を連れて家に戻ってきたから。

【三二九ページ】

問 エリスの家はどういう構造になっているのか説明せよ。

答 部屋は二つで、それに台所がついた簡単なものである。部屋の一つには父の遺骸が置いてあり、もう一つの部屋は屋根裏部屋で、いわば三角形の部屋である。ドアをあけるとすぐ台所という極貧の家である。

問 結局エリスが豊太郎と出会ったときの状況は、どのようなものだったのか、説明せよ。

答 死んだ父親の葬式を出す費用がなく、頼みにしていたシャウムベルヒに金と引き換えに貞操を要求され、母からはそれに従うように打擲されるという、誰も救ってくれる人のいない、追いつめられた状況。

【三三〇ページ】

傍問 なぜ「悪因」(13行)と言っているのか。

答 エリスとの出会いは豊太郎にとって幾たびとなく心を苦しめる原因となったから。

【三三一ページ】

問 豊太郎の免官はどのようにして起こったのか、説明せよ。

答 同郷人の中に事件が起こることを好む者がいて、豊太郎が踊り子の一人と交際していると官長に中傷した。すでに官長から学問の岐路に走る者として憎まれていた豊太郎は即刻免官になった。

問 留学生仲間はなぜ豊太郎を中傷したのか。

答 留学生生活を適当に楽しんでいる仲間は、官長の信頼が厚く優等生である豊太郎の存在を目障りに思い、自分たちの所業が豊太郎の口から官長に伝わる前に先手を打とうとした。

【三三二ページ】

問 母の死は豊太郎にとってどういう意味を持ち、また作品展開上どのような意味を持っているか説明せよ。

答 豊太郎は母の死が自分の行為を諫めたものだと感じていたはずであり、そのことが心奥に痛みとして残っているが、当面は故国とのつながりを断たれ、ドイツに滞留することが可能になった。

作品展開上、母の死は豊太郎を家から開放し、エリスとの恋愛を可能にした。また最終的に豊太郎が母を選ぶかエリスを選ぶかという二者択一の窮地に追い込まれないように救っている。

問 エリスはどういう境遇の少女なのか、まとめよ。

答 エリスはクロステル街の貧民窟とも言うべき、四階の屋根裏部屋に住む、仕立物師エルンスト・ワイゲルトの一人娘。年は十七歳で、十五のとき踊り子の募集に応じた。教育期間が修了したのち、ピクトリア座に出演し、座中第二の地位を占めている。貧しさゆえに十分な教育を受けられず、言葉にもなまりがある。貧しい踊り子でありながら娼婦に転落することもなくこの年まできたが、庇護者であった父を失い、葬式を出す金もない。その弱味に付け込んだ座頭にあやうく情婦にされそうになるが、その危機を豊太郎に救われた。

問 「舞姫」(7行)の境遇はどのようなものか。

答 舞台では華やかだが、その実態は惨澹たるもので、給料は安く、昼間は練習、夜は舞台とこき使われている。あまりの貧しさから、

大半が娼婦となっている。

【三三三ページ】

問「色を失ひつ」(2行)の意味を記せ。

答びつくりして顔が青ざめる。

傍問「この折」(6行)とは、どういふときのことか。

答豊太郎の不意の免官のとき。

問「我が命」(13行)の意味を記せ。

答自分の運命。

【三三四ページ】

傍問「今」(3行)とは、どんな時か。

答小説の冒頭の時点。日本へ帰国の途上セイゴンの港で豊太郎が手記を書いている時点。

問豊太郎とエリスの交わりはどのように変化進展していったのか説明せよ。

答豊太郎は貧しく美しい少女が危機に瀕しているのを見て憐憫の情を覚えた。

←
エリスの貧しさと父の死に同情し、またエリスの媚態に魅せられ、金銭的に援助する。

←
二人の間には「師弟の交はり」が生じ、豊太郎はエリスの教養を高めるために尽力する。

←
二人の間を中傷された豊太郎は免官され、同時に故国の母の死を知る。ここで初めて二人の間に肉体関係が生じた。

←
豊太郎はエリスの家に寄寓し、二人で小市民的で貧しいながらも楽しい日々を送る。

問豊太郎がドイツへ留まった理由は何か。

答女性問題で免官になったという汚名を負ったまま帰国しても、前途は閉ざされているので留まるしかなかった。また外的事情としては、エリスと相沢の助けにより生活のめどがついたから。

【三三五ページ】

問ここには豊太郎とエリスの小市民的生活が描かれている。貧しいながらもほのぼのとした小さな幸福が最もよく描かれている一文を抜き出して記せ。

答「屋根裏の一点灯かすかに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などするそばの机にて、余は新聞の原稿を書けり。」(9行)

問「昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは異にて」(11行)とあるが、ベルリンに着いたところと、今の状況は、それぞれどのようなものか。

答ベルリンに着いたところ——法令の条目という枯れ葉のように無味乾燥な事項を紙上に書き集めていた。

今——活気のあるふれた政界の運動や、文学・美術に関わる新現象の批評などを総括的に捉え、広い視野で現実の生きた社会を把握した。

問「我が学問は荒みぬ。」(9行、三三六・7)と二度繰り返し返されているが、ここには豊太郎のどのような気持ちが表示されているか、説明せよ。

答豊太郎は国家有為の人物となるべく育成されてきた人材でありながら、そのために習得しなければならない体系的、本来的な学問から遠ざかっている。それに対する寂しさと執着がある。根本的に

は学問への強い未練がある。

一方では、現実の生動する社会を知り、知識は幅広く総括的になり、民間学への深い理解を持つことができた。こうした自分に対する自負の念もある。

【三三六ページ】

傍問「夢にも知らぬ境地」(13行)とは、どういふものか。

答新聞雑誌学(ジャーナリズム)において、一種の見識を持つようになり、知識が幅広く総括的になったこと。

問「明治二十一年の冬は来にけり。」(15行)とあるが、この小説で年号が記されているのはこの部分だけである。この文が小説の中でどのような役割を果たしているか説明せよ。

答作品の時代背景が明らかになっており、事件の推移や豊太郎の略歴がつかめる。また、この一文は小説の展開上重要で、ここに豊太郎とエリスの別離が萌芽するのである。

【三三七ページ】

問「室を温め、かまどに火をたきつけても、壁の石を通し、衣の綿をうがつ北欧羅巴の寒さは、なかなか堪へ難かり」(2行)という描写から、どういふことがうかがわれるか。

答北欧の苛烈な自然は、室内でどんなに温かい営みがあってもそれを突き崩そうとする。また、二人の安らぎの巢の中に暗い影が忍び寄つて来たことも意味している。その暗い影とは実は豊太郎の心の中にあつた。

問「今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。」(8行)とあるが、豊太郎はどういふ気持ちであつたのか説明せよ。

答エリスが妊娠したらしく、豊太郎は二人の将来を改めて考えなければいけない状態に置かれている。経済的な見通しは立たず、将来の不安は現実のものとしてひしひしと迫ってくる。豊太郎の心には苦悩と煩悶がある。屋根裏部屋での貧しくもほのぼのとした幸福生活は、もはや豊太郎には心から楽しめるものではない。豊太郎はそうした生活に満足を覚えなくなっており、倦怠と憂鬱と後悔が忍び寄つてきていた。

【三三八ページ】

問「かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。」(8行)から読み取れるエリスの気持ちは何のようなものか。

答エリスは、豊太郎が大臣の前で、身なりで恥をかくことがあつてはならないと大変に気を配っている。また、ひそかに自分たちの前途に明るい希望が開けてくることを期待している。【三三九ページ】
傍問「何、富貴。」(1行)とは、どういふ気持ちで言つたのか。
答豊太郎に捨てられるのではないかという不安から発せられたエリスの言葉をはぐらかし、本心を見つめる勇気のない自分をもごまかそうとする気持ち。

問豊太郎を送り出すときのエリスの心の動きをまとめよ。

答エリスは豊太郎が大臣に会つても恥ずかしくないように正装させ、しばし豊太郎の姿に見ほれ、二人は一体だと思ふ。

←
豊太郎と自分を比較し、二人の育ちや教養、学歴の差を実感する。

←
豊太郎と釣り合わない自分は捨てられるのではないかという不安を覚える。

←
自分を捨てないでくれと豊太郎に懇願する。

豊太郎を名残惜しげに見送る。

【三四〇ページ】

傍問「不幸なる閱歴」（10行）とは、どういうものか。

答豊太郎が免官になった事件の真実。エリスとの清潔な交遊を同郷人に中傷され免官になったことと、その後のエリスとの貧しい生活のこと。

問相沢は豊太郎にどういう要求をしているか。四十字以内で説明せよ（句読点も字数に数える）。

答語学の才能を示して天方伯の信頼を得ることと、エリスとの関係を断つこと。（三十五字）

問「この一段のこと」（12行）とは何か記せ。

答エリスとの恋愛問題。

【三四一ページ】

問相沢は「意を決して断て」（5行）と言っているが、ここには相沢のどういう考え方がうかがわれるか、説明せよ。

答相手の人物・才能などが自分と釣り合わなければ、そうした恋は踏みに行ってもよく、むしろ恋などすべきでなく、国家有為の人物たるべきことこそ至上目的であると考え、功利的、合理的な立身出世主義。

問「されど我が脳裏に一点の彼を憎む心」（三五三・8）とつながってくるのは、このページのどの文か、それを抜き出して記せ。

答「我が中心に満足を与へんも定かならず。」（9行）

【三四二ページ】

傍問「余は心のうちに一種の寒さを覚えき。」（1行）とあるが、それはなぜか。

答自己のエリスに対する不誠実による自責の念や、相沢の言葉を拒否できなかった悔恨などに苦悩し、また、エリスとの関係がどうなるのかという前途への暗い予感におののいているから。

問豊太郎は相沢にエリスとの関係を断つことを約束しているが、どうしてこのような結果になったのか説明せよ。

答豊太郎は、エリスの妊娠により将来への不安を抱き、生きるべき方向がわからなくなっていたときに、相沢から目標を与えられた。けれどもこの目標も豊太郎にはつきりとした意思決定をさせるまでには至らなかった。しかし、「ともかくいちおう」相沢の忠告に従っていた。

問「我が恥」（10行）とは、何のことか。

答自分（豊太郎）の性格上の弱点のこと。豊太郎は友人や目上の者に対してきわめて受動的で、積極的な自己主張ができない、「所動的、器械的」な人間である。それを豊太郎自身よく自覚していて「我が恥」と言っているのである。

【三四三ページ】

問「まだひと月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。」（3行）とあるが、その理由を説明せよ。

答ビクトリア座の座頭シャウムベルヒにすれば、自分の雇い人のエリスを情婦にしようとしたのを、黄色人種の豊太郎に邪魔されたようなものである。また、あろうことか、エリスがその豊太郎と同棲を始めたことにより、恥をかかされた。そこで、その報復に出たから。

【三四四ページ】

問魯国で豊太郎はどういう位置を占めていたか、記せ。

答ロシア宮廷では会話にフランス語が使われている。豊太郎はいち

ばんフランス語がうまいので、客と主人の間で大活躍をした。

問「これ」（13行）は、どの部分をさしているか。

答「余が立ちし……せざりき。」（9～13行）

問豊太郎がロシアへ行つて不在の間、エリスはどういう心境だったのか記せ。

答豊太郎に対する慕情をつのらせ、毎日手紙を書いて寄こし、そして豊太郎が帰国することになれば、自分も同行することまで決心している。

【三四五ページ】

問「我をば見捨てたまはじ」（三三八・16）と「我をばゆめな捨てたまひそ」（9行）の語法の違いを説明せよ。

答じ——打消推量。な……そ——禁止。

問「我をばゆめな捨てたまひそ。」（9行）と書き送ったエリスの心情は、どのようなものか。

答豊太郎と離れている間に慕情をつのらせたエリスは、豊太郎が天方伯に信頼されていることは、やがて豊太郎の帰国、出世につながるだろうと予測し、祖国を離れ、豊太郎と一緒に、はるばる極東の地まで行く決意をしている。そのうえエリスは豊太郎の子を妊娠している。だから、豊太郎にも、絶対に自分を捨てない決心をしてほしいと思っている。

【三四六ページ】

傍問「我が地位」（3行）とは、どういうものか。

答豊太郎の、現在も将来も天方伯の手中にあり、エリスと別れ、伯に従つて帰国し、もとの官僚としての道に戻り名誉挽回をはかるか、あるいは異国で汚名にまみれながらもエリスとの恋を貫くかという岐路。

問「我が近眼」（8行）は、どういうことの比喻として用いられているか。

答全体を見通せず、自分の目の前のことしか見えないこと。

問ロシア行きはこの小説の中でどういう意味を持っているか。

答○豊太郎は、その語学力によつて天方伯に大いに認められ、また信頼され、それがエリスとの別離、帰国となっていく。

○エリスの愛の深さを知り、相沢にエリスとの関係を断つことを約束したことが、どういう結果を生むかに重い心を抱くようになったこと。

【三四七ページ】

問「こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。」（2行）とあるが、これを具体的に説明せよ。

答豊太郎の自我の目覚めも、人間性の自由についての目覚めも、しよせんは異国ドイツでの留学生としてのそれである。したがって、真に自我や人間性の自由に目覚めたとは言えないものである。豊太郎の足は実際にはいつも官僚機構ににぎられていたのである。

問「我が心はこのときまでも定まらず」（15行）とあるが、豊太郎は何に迷っていたのか記せ。

答帰国して出世する道を選ぶか、エリスとの愛に殉じるかに迷っていた。

【三四八ページ】

問ロシアからドイツのクロステル街のエリスの家に戻ったときの豊太郎の心情を記せ。

答それまで、帰国してもとの官僚社会に戻り出世することに傾いていた心は、エリスの激しい愛情に接し、一瞬のことではあるが、エ

リスへの愛によって一掃された。

【三四九ページ】

問 豊太郎に帰国を決意させたものは何か、このページからそれにあたる部分を抜き出して記せ。

答 「もしこの手にしמושがらずば、本国をも失ひ、名誉を引き返さん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念」(8行)

問 「ああ、なんらの特操なき心ぞ、『承りはべり。』と答へたるは。」(10行) には、豊太郎のどういう心理が表れているか。

答 自分の弱い性格ゆえに、エリスの深い愛情を裏切ることになってしまい、そうした自分を道義的に責めている。

問 豊太郎は天方伯に帰国することを承諾する返事をした。それから家に帰るまでの豊太郎の心情を記せ。

答 豊太郎の帰国承諾は、本来の意味での主体的、意志的なものではない。そして、エリスとの別離が帰国の条件となつてはいるが、前者と同様にエリスを捨てるのも主体的、意志的なものではない。どちらを取るにしても優柔不断で、悔いは残るのである。しかし、すでに帰国に傾いていた豊太郎の心はそれを選び、エリスへの慙愧の念に堪えがなくなる。以後帰宅までの豊太郎の心は、自分がエリスの愛を裏切ったところから「我は許すべからぬ罪人なり」(三五〇・12) という道義的な糾弾となり、自身の愛の本質を問う姿勢は全く見られない。

【三五一ページ】

傍問 「余が彼に隠したる顛末」(11行) とは、どういうことか。

答 エリスが豊太郎の子を妊娠していること。

【三五二ページ】

問 「この恩人は彼を精神的に殺ししなり。」(2行) とあるが、ここに示されている豊太郎の心情を説明せよ。

答 エリスの愛を裏切ったことへの激しい自責の念を持つていながら、相沢に責任転嫁をするような言葉である。しかし、その根底には自己不信があり、すべてを相沢のせいにして、自分が傷つくのを避けようとしたのではない。

問 「バラノイアといふ病なれば、治癒の見込みなしといふ」(15行) とあるが、作者はなぜエリスを完全な狂女にしてしまったのであろうか。

答 豊太郎は立身出世を決心し、その方向に再び歩み始めた。エリスが発狂したため、豊太郎はエリスと以前の生活が続けることが不可能になった。作者はエリスを狂女にし、豊太郎が後戻りできないように迷いから救ったのである。

【三五三ページ】

問 「ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裏に一点の彼を憎む心今日までも残れりけり。」(8行) について、

① 相沢のどういう点を良友として評価しているのか。

② 豊太郎はなぜ相沢を憎んでいるのか、説明せよ。

答 ① 相沢は免官になった豊太郎に就職をあっせんしたり、豊太郎の名誉挽回をはかり、帰国・出世コースへ引き戻したりするなど、友人の社会的栄達のため尽力している。かつて豊太郎が同郷の留学生たちにそうされたように、一人でもライバルを蹴落とそうとする官僚世界にあって、相沢は決して豊太郎を見捨てない。友情に厚く、親分肌で面倒を見る。こうした点を良友としている。

② 豊太郎はエリスとの愛の生活を捨てる決心はしていなかった。こ

のエリスとの生活に象徴される豊太郎の人間的な部分を、相沢は無惨にも踏みにじつてしまったのである。そして相沢は豊太郎を再び非情な官僚社会に強引に連れ戻した。豊太郎が相沢を憎むのは、単なる責任回避や責任転嫁ではない。自分の中にある相沢健吉的要素を憎み、また、主体的に運命を選び取れなかった自分を糾弾し、その弱さ、優柔不断さを責めているのである。

問 『舞姫』の文体にはどのような特色があるか。

答 和文体が基本になっており、それに漢文脈と、当時では新鮮な欧文脈が渾然と一体になった一種の文語文体(雅文体)である。